

メインシナリオ／グランド第6回
『あなたのための希望のうた 第6話』 個別リアクション

『箱船の目的』

障壁の縮小はやむを得ない。

その言葉はエリスの心を暗くさせた。

それから、出航後の未来について疑問が沸き上がる。

「あの、もし箱船が移住先を見つけて戻って来るとして……、再出航の時にもまた障壁は狭まるのでしょうか？」

「それはどうでしょうね……。船に乗った水の魔術師がどれくらい生き残っているかが鍵になるかもしれません。その後のことは、私にもよくわからないのです。そもそも、広大な海の底のここを見つける手立てがあるのかどうか」

「そ、それってつまり……箱船の本当の目的は……」

そこから先を言うのが恐ろしくなり、エリスの声はしぼんだ。

けれど、ナディアは続く言葉をわかっているかのように頷く。

「できれば、移住先を優先させてほしいと、私は思っています。船とここを繋ぐ手立ては……まだ見つかっていませんが」

「……洪水って、すぐに収まるのですか？」

「長い時がかかると思われます」

憂い顔で答えるナディアに、エリスはしばらく途方に暮れた気持ちで、膝の上で組んだ手を見つめていた。

「あなたみたいな人は……」

と、ため息混じりにルースが口を開く。

「あなたみたいな人は、きっと自力で真実にたどり着いてしまうんでしょうね。その時に騒がれても面倒だから、今言っておくわ」

突然のことにエリスは戸惑うが、ルースは落ち着くのを待ってはくれなかった。

「箱船は、水の魔力の吹き溜まりを探すのが真の目的よ。それが第一。移住地は二の次ね。どうでもいいというわけではないけれど、そうするのが人類のためなのよ」

「納得……してるんですか？」

エリスの声が震える。

ルースははっきりと頷いた。

「伯爵と話し合って納得済みよ。このこと、みだり口外したらダメよ。暴動になりかねないから」

このことは、エリスにもナディアにも衝撃を与えた。

けれど、心の隅ではこうも思っていた。

——ああ、やっぱりな……。と。

こちらのリアクションは以下のPCに発行されています。
エリス・アップルトン